真冬の白牡丹

いき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真冬の白牡丹

【コード】

N9401Q

【作者名】

いき

【あらすじ】

前夜、恋人と喧嘩してしまい、重い足取りで帰路につく俺。

彼女に携帯で連絡することもせず、ホールケーキを手に自分の家へ。

(前書き)

2009年12月に書いたものです。

私が過去に書いた恋愛系の短編は、全て「なるつ」「にもアップしよう」と思っております。

今回はこの「真冬の白牡丹」を投稿します。

心地よい振動が眠気を誘う。

ふと、振動が止まる。冷気に頬を撫でられ目を開けた。

「次か。ぎりぎり今日中だな」

窓の外に見るともなく目を向ける。車内の灯りは、下りきった夜のとばりをこじ開けるには至らない。対向側、上りの線路がうすぼんやりと見えるだけだ。

「あ」

白いものが視界を過ぎる。曇った窓を掌で拭いた。

大きな牡丹雪だ。見る間に雪片が視界を埋めつくす。

「ホワイトクリスマス、か」

ドアが閉まり、俺を乗せた電車が再び動き出した。

「昨日は言い過ぎた。……ごめん」

俺は携帯に打ち込んだ文面を眺めたが、送信せずに破棄した。

やっぱり、こういうことは直接言わなきゃ。

携帯をしまい、その手で膝の上に置いた箱を撫でる。大きめのホルケーキ。俺が子ども頃はケーキ屋でしか買えなかったが、今ではコンビニでも買える。

彼女とは昨夜の別れ際に大喧嘩。あれからメールひとつしていない。おまけに、突然の残業で日付が変わる寸前だ。

「まったく、どうかしてる」

この状況で、彼女が部屋で待つてくれることを期待するなんて電車が駅に着いた。改札を出る人の波の一番後ろから、俺は重い足取りで帰路についた。

開けたドアの内側から、屋外よりも寒々とした闇が俺を出迎えた。爪先で上がりかまちを探りつつ、手探りで電気をつける。

「ふっ」

玄関に彼女の靴はない。わかっていても、落胆のため息が漏れる。そろそろ、日付が変わる。

リビングのテーブルにケーキの箱を置き、家の電話を確認する。留守番メッセージなし。

「ホールケーキなんて買うんじゃないかった」

一人で食べきれない大きさじゃない。というか、独りで食べてもむなしいだけだ。

「風呂入って寝るか……ん？」

風呂に意識を向け、ようやく気付いた。水の音だ。

「あちゃー、もしかして蛇口閉め忘れたか」

今までそんな失敗をしたことはなかったが、今日はついてない日なのだ。いつかやるかも知れなかった失敗を、今日だからこそやらかしてしまったのかも。

あわててバスルームへ。

「あっ」

我ながら間抜けな声を漏らしたものだ。洗面所には丁寧に折り畳まれた彼女の服と靴。濡れた靴をここで乾かしていたのか。

バスルームの扉から、彼女が首を出した。

「おかえりなさい。先にお風呂いただいてるわよ」

昨夜の別れ際からは想像のできない、屈託のない笑顔で彼女が言う。

湯気にあてられたのだろうか。俺の頬が温かくなってきた。

「おっ、おう。あのさ」

視線で問いかける彼女に、俺は締まりのない顔を向けていたのに違いない。

「昨日はごめんな。……今から俺も入っていい？」

彼女が髪を乾かしている間、俺はベランダから外を見ていた。

窓から漏れるわずかな灯りを反射して、真冬の夜闇にしんと

舞い踊る白牡丹。

「湯冷めしちゃうよ」

背中が温かい。彼女の細い両腕が俺に巻き付いた。

テレビの前に座った俺に、彼女はDVDを差し出す。俺は彼女の目を見て神妙に申し出た。

「昨日は本当に悪かった。どんなのもつき合っよ」

「考えたんだけどさ。両方見ればいいじゃない。あなたが観たいラブロマンスと、私が観たいホラー」

（真冬にホラーかよ！）

昨夜の言葉はぐつと呑み込む。取るに足らない喧嘩の原因。一応、自覚している。だいたい、イブの夜にDVD鑑賞だなんて、普通ありえない。

部屋の電気を消し、ツリーのコンセントを入れる。俺たちは少し、部屋を満たすクリスマススイブの光を満喫した。

軽く食事をはさみながら映画を二本見終える頃、東の空は白み始めていた。

彼女はホラーを最後まで観ることなく、俺の肩に頭を預けて寝息を立てている。俺は映画の後半、ほぼ彼女の顔ばかり見ていた。その髪を軽く撫でてみたら、まだほんのりとシャンプーの香りがする。窓の外がいよいよ明るくなってきた。昇り始めた朝日を浴び、ベランダに降り積もった雪が白銀に輝いているのだ。

今日の仕事、たぶん辛いだろうな……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9401q/>

真冬の白牡丹

2011年2月22日14時18分発行